

平成29年度

秋田県埋蔵文化財 発掘調査報告会

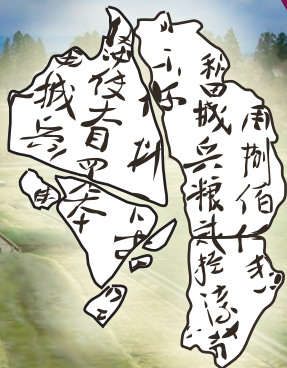
平成30年3月11日(日)

会場 秋田県生涯学習センター

発見された
第7号漆紙文書



史跡払田柵跡 (大仙市・美郷町)



堤沢山遺跡
(由利本荘市)



片貝家ノ下遺跡
(大館市)



手の上遺跡
(潟上市)



史跡秋田城跡
(秋田市)



大館城跡
(大館市)



史跡檜山安東氏
城館跡
(能代市)



金沢城跡
(横手市)



一本杉遺跡
(横手市)



主催 秋田県埋蔵文化財センター
共催 秋田県生涯学習センター

目次

平成29年度県内発掘調査遺跡一覧表……表紙裏

平成29年度県内発掘調査遺跡位置図…………… 1

一本杉遺跡…………… 2

報告者:横手市教育委員会文化財保護課 島田祐悦主席主査

史跡秋田城跡(第108次調査)…………… 4

報告者:秋田市立秋田城跡歴史資料館 児玉駿介主事

史跡弘田柵跡(第151次調査)…………… 6

報告者:秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所 宇田川浩一副主幹

片貝家ノ下遺跡…………… 8

報告者:秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 村上義直副主幹

手の上遺跡…………… 10

報告者:秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 武内真之学芸主事

金沢城跡(第9次調査)…………… 12

報告者:横手市教育委員会文化財保護課 島田祐悦主席主査

堤沢山遺跡…………… 14

報告者:秋田県埋蔵文化財センター調査班 山村剛学芸主事

史跡檜山安東氏城館跡(檜山城跡)…… 16

報告者:能代市教育委員会生涯学習・スポーツ振興課 播摩芳紀主査

大館城跡…………… 18

報告者:大館市教育委員会歴史文化課 馬庭和也主任主事

大沢Ⅰ・Ⅱ遺跡…………… 20

鎧ヶ崎城跡…………… 22

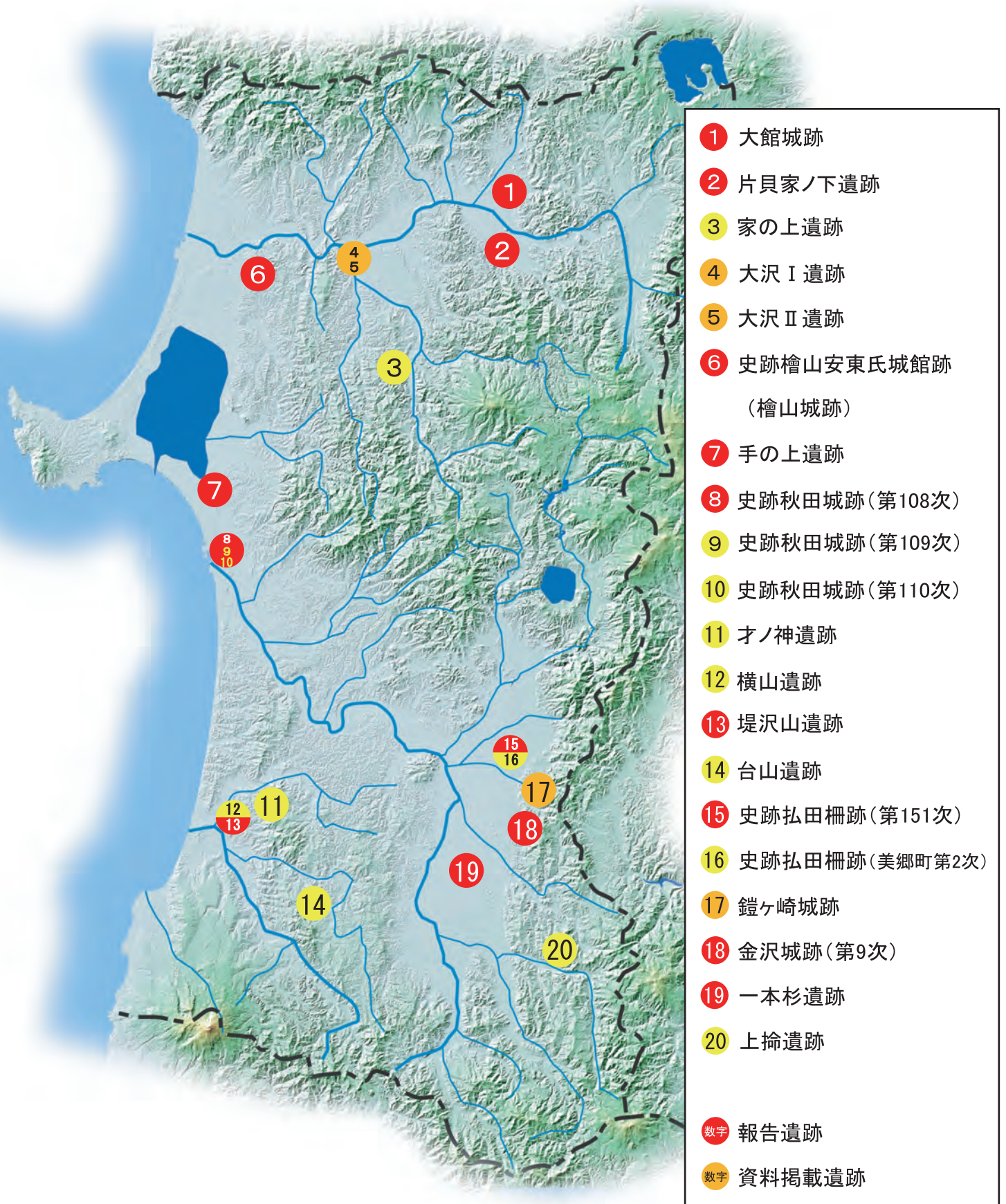
年表…………… 裏表紙
(太字は報告遺跡)

平成29年度県内発掘調査遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査面積 (㎡)	主な時代・ 遺跡の性格
1	大館城跡	大館市字中城	大館市教育委員会	743	近世:城館跡
2	片貝家ノ下遺跡	大館市比内町片貝字家ノ下	秋田県教育委員会	906	平安:集落跡・水田跡
3	家の上遺跡	北秋田市阿仁吉田字家の上	北秋田市教育委員会	200	縄文:集落跡
4	大沢Ⅰ遺跡	能代市二ツ井町麻生字大沢	能代市教育委員会	403	縄文:集落跡
5	大沢Ⅱ遺跡	能代市二ツ井町麻生字大沢	能代市教育委員会	1,036	縄文・平安:集落跡
6	史跡檜山安東氏城館跡(檜山城跡)	能代市檜山字古城・大間木	能代市教育委員会	131	中世:城館跡
7	手の上遺跡	潟上市昭和豊川船橋字手の上	秋田県教育委員会	720	平安～中世:河川跡
8	史跡秋田城跡(第108次)	秋田市寺内焼山	秋田市教育委員会	534	奈良・平安:城柵官衙跡
9	史跡秋田城跡(第109次)	秋田市寺内焼山	秋田市教育委員会	41	奈良・平安:城柵官衙跡
10	史跡秋田城跡(第110次)	秋田市寺内焼山・大畑	秋田市教育委員会	44	奈良・平安:城柵官衙跡

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査面積 (㎡)	主な時代・ 遺跡の性格
11	オノ神遺跡	由利本荘市徳沢字オノ神	由利本荘市教育委員会	466	縄文:集落跡
12	横山遺跡	由利本荘市福山字居屋敷	由理柵・駅家研究会	150	平安:集落跡・水田跡
13	堤沢山遺跡	由利本荘市川口字大字堤沢山	秋田県教育委員会	300	中世:生産遺跡
14	台山遺跡	由利本荘市東由利老方字台山	東由利の遺跡を発掘調査する会	70	縄文:集落跡
15	史跡弘田柵跡(第151次)	大仙市弘田字仲谷地	秋田県教育委員会	178	平安:城柵官衙跡
16	史跡弘田柵跡(美郷町第2次)	美郷町本堂城回字百目木	美郷町教育委員会	7	平安:城柵官衙跡
17	鎧ヶ崎城跡	美郷町六郷東根字北鎧ヶ崎	美郷町教育委員会	36	中世:城館跡
18	金沢城跡(第9次)	横手市金沢中野字権五郎塚	横手市教育委員会	200	平安・中世:城館跡
19	一本杉遺跡	横手市平鹿町下吉田字一本杉堂ノ後	横手市教育委員会	7,200	古墳～中世:集落跡
20	上掬遺跡	東成瀬村田子内字菅生田掬・字上掬	東成瀬村教育委員会	151	縄文:集落跡

(太字は報告遺跡、番号は右頁の位置図に対応します。)
※片貝家ノ下遺跡は地中レーダー探査



平成29年度県内発掘調査遺跡位置図



一本杉遺跡

横手市平鹿町下吉田字一本杉堂ノ後

一本杉遺跡は J R 奥羽本線横手駅から西約 8 km に位置し、^{ちゅうせき ち}沖積地内の南北に延びる微高地上にあります。県営ほ場整備事業に伴い、遺跡の消滅する約 7,200m²の発掘調査を行いました。

調査の結果、古墳時代の^{たてあな}竪穴建物跡 5 棟、^{みぞ}溝跡 7 条、^{ど ころ}土坑 4 基、奈良時代の竪穴建物跡 2 棟、平安時代の竪穴建物跡 1 棟、^{ほったてばしら}掘立柱建物跡 20 棟以上、溝跡 7 条、井戸跡 3 基、中世の掘立柱建物跡 5 棟以上、^{ほりあ}堀跡 1 条などが検出されました。古墳時代と奈良時代は A 区 (①) に、平安時代と中世は B 区 (②) にそれぞれの主体域があります。今回は古墳時代について報告をします。





古墳時代の竪穴建物跡は、A区に4棟、B区に1棟確認されました。A区の竪穴建物跡の形態はやや長軸の長い方形をしており、外周には溝が巡らされているのが特徴です。B区は床面検出であったため、外周溝は確認されませんでした。竪穴建物跡の長軸は最少で8.25m、最大で10.35mを測り、面積は約67～107㎡、写真の人のサイズから巨大な建物であることが分かります（③）。



竪穴建物跡の内部構造には共通性が見られました（③・④）。建物にはカマドが付されておらず、中央部に地床炉のあるものが2棟、その他にはありませんでした。

建物跡の支柱穴は、大きな建物にも関わらず全て4本柱でした。中には土器を置いている柱穴もあり、建物の廃棄行為がなされた可能性もあります。建物内の土器に完形のものがほとんどないことも補強材料となるかもしれません。

床面は貼床がなされており、土間のような状況でした。さらに四隅が三角形のように深く掘り込まれていました。壁際には布掘状に溝跡が確認されました。このうち1棟は焼失家屋で、板材が中央に倒れている様子が確認されていることなどから、竪穴部には板材が巡らされていたのかもしれません。

また、四方の壁際から建物の中央に延びる溝を複数確認しました。これは部屋を仕切る間仕切り溝と考えられます。二本の間仕切り溝の間に土坑のある箇所が見られ、1棟を除いた全ての建物で確認されることから、貯蔵穴であったのかもしれませんが。

土器の中で唯一原型を保ったまま出土したのがありました（⑤）。土坑の中に土師器の高坏・埴が並べて置かれたのでしょ。古墳時代の遺物は、土師器が大勢を占めますが、須恵器の坏・黒曜石・管玉・石製紡錘車など貴重なものも含まれます。



一本杉遺跡は、秋田県で古墳文化の集落の様相が初めて明らかになった遺跡であり、古墳文化圏を県南部で確認することができた非常に貴重な例です。このような集落形態は、土器の様相から5世紀中葉～後葉のものと考えられます。石川県能登地域の四柳ミッコ遺跡に類例がありますが、県内の古墳文化の消長など、検討課題が多い時代です。

（横手市教育委員会）



史跡秋田城跡 (第108次調査)

てら うち やけ やま
秋田市寺内焼山

史跡秋田城は、秋田市北西部の寺内地区を中心とする標高40～50mの通称高清水丘陵上に位置する奈良・平安時代の古代城柵の遺跡です。昭和14年に国の史跡に指定され、国による調査を経たのち、昭和47年から秋田市による保存管理のための調査が継続して行われています。平成29年度は秋田城政庁跡の西部の焼山地区で第108次調査を行いました。

第108次調査地はこれまでの調査（第99次調査等）で9世紀第2四半期以降に造営された方形区画施設が周辺で検出されています。調査地は、この方形区画施設の主要建物等が存在する可能性が高い場所でした。かつて住宅がありましたが、平成27年度に解体撤去されたため、調査が可能となりました。

調査の結果、4層面で古代の遺構が検出されました（①）。4層は近世以降の耕作によって削平を受けていましたが、遺構は残存しており、掘立柱建物跡2棟、柱列跡1条、材木塀列跡1条、竪穴建物跡5棟、埋土に焼土を含む焼土遺構9基、その他溝跡、土坑、ピットが検出されました。なお、建物の柱掘り方ではなく、大きさが約1m以上で埋土に焼土を含まないものを土坑としました。

掘立柱建物跡は、第96次調査で一部検出されていたSB2065の延長を、A区北西隅で確認し、南北2間（北から2.55m+2.55m）東西1間（2.7m）となりました（②）。時期は出土した土器から9世紀第2四半期以降と考えられます。建物の方位は南北方向柱筋が北から約11度東に振れます。柱痕跡から径18～20cmの柱が建てられたと考えられます。A区北東部ではSB01が検出され、現在南北2間以上（3.3m+3.3m+…）×東西1間（2.6m）を確認しています。建物の方位は南北方向柱筋が北から約9度東に振れます。時期は9世紀第2四半期以降と考えられます（③）。

材木塀列跡は、第99次調査で検出していたSA2149の延長を調査区南西で約2.5m検出し、北から約15度東に振れます。また、調査区北西部で北から約45度東に振れる柱列跡SA01を検出しました。





竪穴建物跡はA区の全体でそれぞれ確認し、大きさは2～4m四方とばらつきがあります。SI01のみ東壁が北から約10度東に振れ、他はおおむね真北に軸がとられています。時期は9世紀第4四半期～10世紀前葉と考えると考えられます。また、調査区中央部のSI02南西隅において、秋田城の瓦を補強材に転用したカマド遺構を確認しました(④)。



焼土遺構はA区全体に分布しており、全体的に長軸2.1～2.8m×短軸1.4～1.7mとなります。長軸が北から約30度東に振れるものとこれらに直交するものがあります。これらの遺構は9世紀第2四半期から第4四半期のものと考えられます。また、方位規制と時期から、先述の区画施設や掘立柱建物と同時に機能していた可能性があります。また、これらの遺構には、焼け面や粘土ブロック、炭化物が埋土に含まれており、一部遺構で碗型鉄滓や金床石の可能性をもつ被熱した礫が出土していることから、鍛冶関連施設であった可能性が考えられます(⑤、⑥)。



なお、今回の調査では、特に平安時代を中心とした遺物が出土しています。

鉄に係わる遺物としては、刀子、鉄鏃等の鉄製品のほか、土製品としてフイゴ羽口や、先述した礫・鉄滓も多く出土しています。

古代の土器としては、奈良・平安時代の須恵器、赤褐色土器・土師器等が出土しており、坏等の食器類・甕等の煮炊具が主体となります。



以上のことから、この地点は9世紀第2四半期から第4四半期にかけて方形の材木堀区画で囲われており、その中に鍛冶関連施設が存在していた可能性があります。そして、その後、元慶の乱(878年)前後にこれらが廃絶し、方位規制が真北方向となって、竪穴建物群へと変容したと考えられます。今回の調査により、方形区画の中心部分がより北東に寄ることが想定されるので、今後は、その実態解明が必要であると考えています。

(秋田市立秋田城跡歴史資料館)



史跡^{し せき}弘田^{ほっ たの}柵^{さく}跡^{あと} (第151次調査)

大仙市^{ほっ た あざ なか や ち}弘田^{ほっ た}字^{あざ}仲谷^{なかつ}地

史跡弘田柵跡の第151次調査は、外郭^{がいかく}南門^{みなもん}の外^う(南)側^{みな}、南大路^{みなおお}の西側^しに広がる^{ちゅうせき}沖積地^ちで行いました(①)。南大路^{ほったて}の両側^{はしら}には掘立柱建物^{ほったてはしらたてもの}と広場^{ひろば}があります。この広場は東西200m、南北100mにも及ぶ半円形で、9世紀初めに弘田柵が創建されてから10世紀後半の終末期まで、連綿^{もろ}と盛土^{もり}を行い、かさ上げと整地を繰り返していたことがわかっています。



第151次調査では、二つの目的をもって発掘に臨みました。一つ目は低湿地を盛土整地した範囲を確定し、遺構分布と盛土工事の技法を明らかにすること、二つ目は盛土層基底部と自然堆積層の境界を決定することです。

調査の結果、盛土面を10cm掘り下げると、建物^{たてもの}跡^{あと}が1棟、柱列^{はしら}が1条、溝^{みぞ}跡^{あと}が4条見つかりました。盛土の範囲と末端での土留め工法を確認するには至りませんでした。盛土層中に遺構が多く

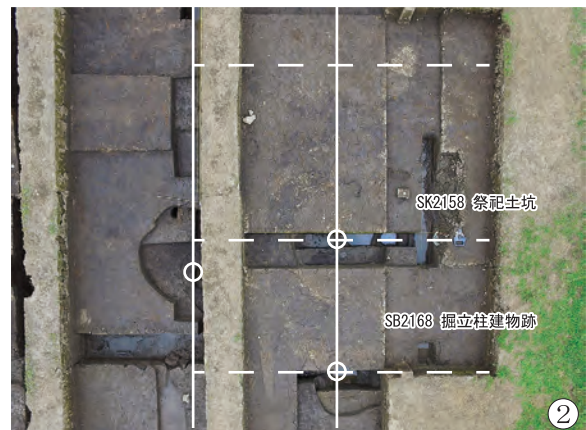
作られている古い盛土面が見つかりました。また、盛土層と自然層の境界を確定できたことと併せて、思いがけない発見もありました。第7号漆紙文書の出土です。

昨年度までの調査で、盛土された広場には踏みしめられたような硬い面があり、その下にも遺構があることがわかっていました。今年度、思い切って硬い面を取り除いたところ、柱穴^{はしらあな}や溝跡など多くの遺構が現れ始めました。

その中でも、1つの柱穴^{すみまる}は隅丸の不整形で1辺が80cm程もあり、南大路東西に復元されている大形建物の柱穴に近い大きさであることから、他の柱を探して建物を組むことができるかを考えました(②)。2年前には、この柱穴から北へ264cmの場所に祭祀土坑^{さいし どこう}が発見されていました。今回は、その祭祀土坑を再発掘するとともに周りを1段掘り下げてみました。祭祀土坑と考えてきたものは、1回以上建て替えられて重なり合った柱穴の一番新しい1基であり、祭祀は柱の抜き取り後に行われたことがわかりました。今年発見した柱穴と祭祀土坑をつなぐと、南大路西側建物と南北方向の軸線が合致します。このことから新たな建物になると判断し、SB2168掘立柱建物跡と命名しました。

SB2168掘立柱建物跡の西側2.1mには、同じように南北軸に沿って等間隔に並ぶ4基の柱穴があり、柱列となることがわかりました。柱穴の大きさが直径50cm程とSB2128掘立柱建物跡に比べて一回り小さいのですが、方向が合致することから底であるかもしれません。または、時期の異なる別の建物がもう一棟あるのかもしれません。今のところ二つの可能性をあげておきます。

さて、盛土が最初に積まれたのはどの地層なの

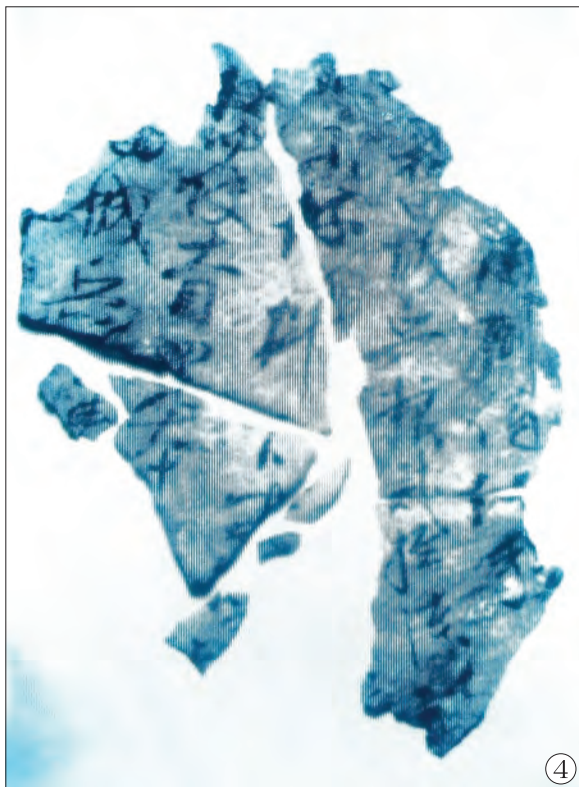




でしょうか。昨年の調査ではその地層を明らかにすることが出来なかったので、その解明が今回の調査の大きな目的となりました。地形の傾斜に沿って南北方向に24mの長いトレンチを掘り、地層の変化を調べました。その結果、盛土は直径20cm程度の白い粘土の塊を敷き詰め、その上に土砂を積んでいることがわかりました。土地を乾燥させるために設けられた排水溝や、一時期ヨシが生い茂った可能性を示す痕跡も認められました。

盛土を掘り下げていく過程で、当時の人々が積んだ土の単位が見えてきました。その単位のひとつから第7号漆紙文書が出土しました(③)。地層の年代は、10世紀第2四半期(西暦926～950年)です。共伴した土器は古いものは9世紀第2四半期から含まれており、文書が捨てられた年代も100年ほどの幅を持たせて考える必要があります。

文書は表裏両面に文字が書かれていました。一方の面には、「秋田城」、「兵糧」、「大目置本」などの文言と「捌佰伍拾」、「貳拾漆斛」といった数量が書かれています(④)。このように、数字が正式な大字で書かれていることは、この文書が帳簿であることを示します。文字の頭がそろっておらず、字の大きさがまちまちであることから、下書きであると考えられます。「秋田城」という文字は、出土資料では全国で初めての発見です。払田柵跡と秋田城の間で、兵糧などの物資が流通したことを具体的に示す行政文書となりました。そして、国司四等官である大目が責任者として払田柵跡に常駐していた可能性があります。今まで、第100次調査(1994年)出土第2号漆紙文書に書かれた「事力長」や第49次調査(1983年)出土第17号木簡にある「申請借稻」という状況証拠から、払田柵にも国司がいたかもしれないと推定されていたことが、今回の発見でより明確になりました。



もう一方の面には「无位 ○○ (公) 連」と2行7文字が書かれていました。位階と氏名が書かれており、地元の役人が書いた書類の下書きです。

今回の調査では、盛土層を1枚剥がして確認された古い盛土面から大きな掘立柱建物跡が見つかりました。また、低地の埋め立て工事が2回に分けて行われており、排水路が作られていたこともわかりました。南大路の両脇の広場が何のために造成されたのか、また、新たに見つかった建物の大きさや排水路の配置方法等、広場の性格・施設の内容・造営工法の具体などの解明といった様々な課題が山積みです。すぐには解決できませんが、一つずつ明らかにしていきたいと思います。

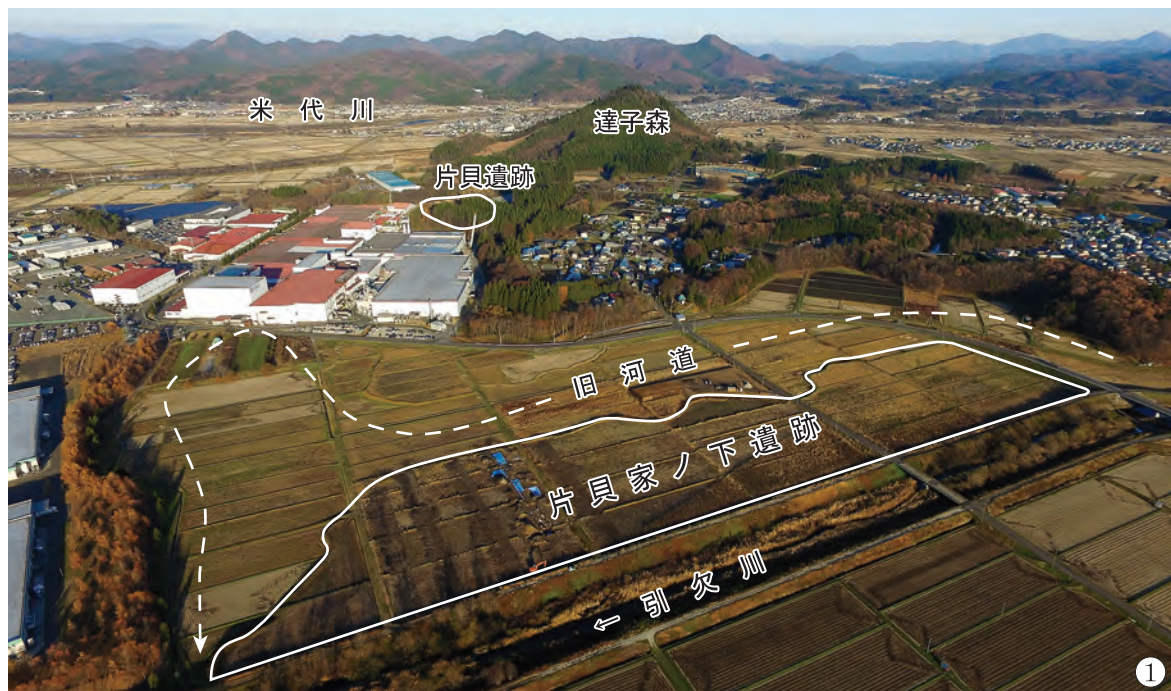


かた かい いえ の した 片貝家ノ下遺跡

ひ ない まち かた かい あざ いえ の した 大館市比内町片貝字家ノ下

片貝家ノ下遺跡はJ R花輪線扇田駅の南西2km、米代川支流の引欠川右岸、標高58mの沖積地に立地します(①)。引欠川は昭和30年代後半に行われたほ場整備に伴い流路が変わるまで、遺跡の北東側を流れていました。遺跡は本来この川の左岸にあったことになります。遺跡の北東700mには、平成27・28年に調査を行った同じ平安時代の片貝遺跡があります。

引欠川流域は、古くより地中から建物が見つかることで知られ、江戸時代の紀行家菅江真澄も本遺跡から5kmほど下流の大披・板沢地区を訪れ、遺物や建物の出土地点を記録しています。



片貝家ノ下遺跡は平成27・28年に行われた確認調査で、西暦915年の十和田火山の大噴火に伴う火山泥流堆積物に埋もれた平安時代の集落と水田耕作地であることが分かりました。

この遺跡の特徴は、噴火に伴う災害の直前まで営まれていた集落が、非常に良い状態で保存されていることです。915年の十和田火山の噴火は、大規模な火山泥流を誘発し、米代川流域の低地を膨大な土砂で埋め尽くしました。火山噴出物を主体とする土砂はシラスと呼ばれています。遺跡は、このシラスによってバックされています。そのため、ほかの遺跡ではほとんど確認できない当時の地面の小さな起伏や、立ったままの状態でも埋もれていった建物の痕跡などが残されているのです(②)。



これまでの調査で検出した主な遺構は、堅穴建物跡13棟、堅穴・掘立柱併用建物跡1棟、掘立柱建物跡3棟、板塀跡9条、溝状遺構15条、土坑6基、焼土遺構8基、水田跡などです。遺跡全体の数%しか掘っていない状況で多数の建物跡を検出していることから、大規模な集落であったと推測されま



す。2回の確認調査の成果により、遺跡の概要は分かりましたが、当時の米代川流域の村の実態を明らかにする上で最重要視される「推測される建物の数」や「遺跡の存続期間」などについてのデータは得ることはできませんでした。

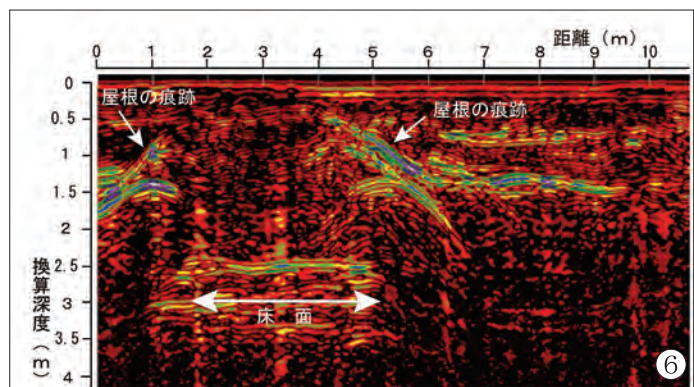
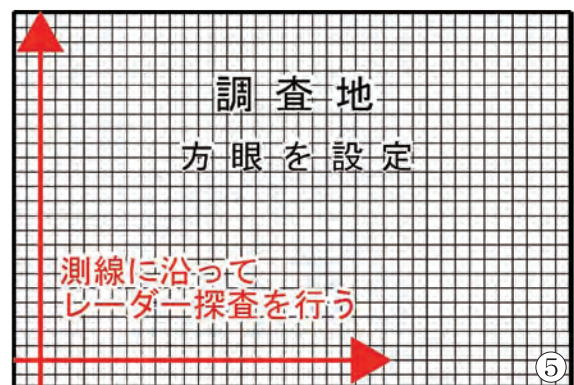
そこで今年度は、「地中レーダー探査」で、掘らずに遺跡の中身を探ってみることにしました。探査を実施したのは、平成27年度に調査対象範囲とした遺跡の北西側3地点です(③)。各地点とも確認調査で建物跡を検出した範囲を意図的に含め、それらの建物の地中レーダーでの見え方を確認するとともに、新たな遺構の検出に努めることにしました。

レーダー探査の手順は、調査地に1m方眼を設定し、その線に沿って縦横にレーダーをかけます(④・⑤)。すると地中の垂直方向の断面画像が得られます。このようにして得た多数の測定画像を解析することによって、地中に眠る遺構の位置や形状を断面や平面で予測することが可能になります。

このような方法で探査を実施したところ、調査地3では、日本で初めての発見となった「3次元的に屋根の形を残す竪穴建物跡」の屋根の傾斜や竪穴の床面を画像で捉えることができました(⑥)。同じように調査地1でも、確認調査で検出した竪穴^{ゆかめん}の床面や、竪穴の周辺に盛り土された^{しゅうてい}周堤を確認できます。さらに、確認調査で検出した建物の周辺域においても、新たな遺構の反応を多数捉えることができました。以上の結果から、片貝家ノ下遺跡においては、地中レーダー探査が極めて有効であることが分かりました。

今回のような調査を積み重ね、遺跡内における建物の数や分布、建て替えの推移が明らかになれば、遺跡内で最も古い時期の建物を予測することが可能になります。村のはじまりの時期が明らかになれば、片貝家ノ下遺跡は878年の「元慶^{がんぎょう}の乱^{らん}」時に存在した村なのか、また、元慶の乱において反乱拠点の一つとして記録に残る「火内村^{ひないむら}」ではないのか、といった謎・疑問を解明していくことができるでしょう。

片貝家ノ下遺跡には、他の遺跡では得られない膨大な情報が保存されています。調査によって蓄積された情報の解析により、将来復元される村の景観は、当時の姿に限りなく近いものになるでしょう。





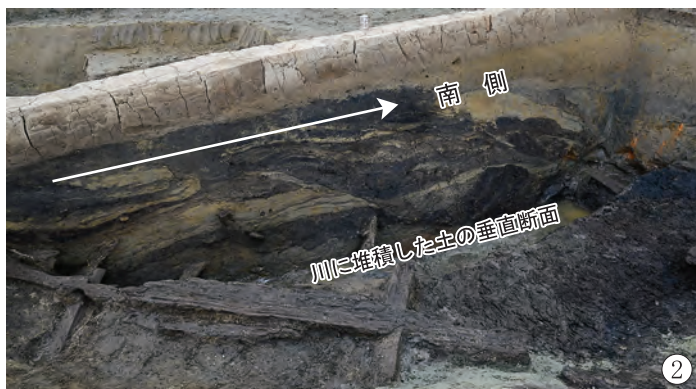
て うえ 手の上遺跡

しょう わ とよ か わ ふ な ば し あ ざ て うえ 潟上市昭和豊川船橋字手の上

手の上遺跡はJ R奥羽本線大久保駅の東3.2 kmに位置し、八郎潟に向けて西流する豊川流域に形成された谷底平野に立地します（①）。遺跡は標高8 mの豊川左岸にあります。現在の流路は過去の河川改修によって直線的に掘り替えられた部分と考えられますので、本来は旧豊川の右岸にあったとみられます。



本調査では、旧河川とそこに構築された施設を検出し、旧河川内からは木製品を中心とする遺物がたくさん出土しました。出土遺物の年代から、江戸時代には旧河川の流路は完全に埋まりきっていた



ことが明らかになりました。河川内から出土した最も古い遺物は10世紀始め頃のもので、その頃から13世紀頃にかけて、河川の流路は次第に南側へ移動していったようです（②）。この河川は豊川の旧河川と考えられます。



旧河川に構築された施設は、木杭を等間隔に打ち込み、板材を横に組んで作られた護岸施設です（③）。板材を留める杭材は、板材の南側に設置されていることから、この護岸は河川北岸に構築されたと考えられます。このほか、河川内からは間隔を空けて打ち込まれた杭列も見つかり、船の係留に使用されたとも考えられます。旧河川底面の杭列の間からは木製の卒塔婆が見つかりました（④）。川底に堆積



した砂利に埋もれた状態ですので、上流側から流されてきたと考えられます。

出土した遺物には中国産の磁器（⑤：白磁・⑥：青磁）があり、中でも白磁の四耳壺は、お寺などの宗教関連施設で使われた可能性があります。他には木簡（⑦）や鋳型（⑧）も発見されています。木簡は、信仰・呪術行為に用いられた呪符木簡か文字の練習を主な目的として書かれた習書木簡と思われます。鋳型は、出土した鉄鍋（⑨）との関係が注目されます。



豊川流域は、古くから開けており、縄文時代以降、多くの遺跡が分布しています。手の上遺跡の周辺では、北約1kmに縄文時代晩期の苗代沢遺跡があり、漆塗り土器等が出土しています。また、東約1kmには、「秋田」銘入り平瓦などが出土して秋田城との深い関連性を示す羽白目遺跡があります。手の上遺跡は、羽白目遺跡の時代の頃の豊川にあたる場所にあることとなります。江戸時代には、西側約2kmの毘沙門遺跡で土坑や掘立柱建物跡が見つかっています。

今後は、文字の解説や鋳造品の種類を特定するための分析・研究を進めるとともに、周辺の歴史的環境を踏まえ、遺跡の評価をしていきたいと思えます。





かね ざわ じょう あと 金沢城跡 (第9次調査)

金沢城跡は、J R 奥羽本線^{ご さんねん}後三年駅から東北東3.5kmに位置し、奥羽山脈が盆地^{しんだて}上にせり出した丘陵上に立地します (①)。東側に金沢城跡西麓部、西側に陣館遺跡^{う しゅうかい どう}があり、その間に羽州街道が南北に延びています。

金沢城跡の調査は、『後三年合戦^{ご さんねん かつせん}絵詞^{え ことば}』などに描かれている金沢柵^{かねざわの さく}の

場所を特定するため、現在のところ金沢城跡と陣館遺跡を含んだエリアを想定し、調査を進めてきました。最初に調査を行った陣館遺跡は、その成果から清原氏^{きよはら し}に関わる遺跡として、平成29年10月に「大鳥井山遺跡附陣館遺跡^{おおとり い やま い せき つけ じんだて い せき}」として国史跡に追加指定されました。

今回の調査区は、羽州街道沿いに突き出た尾根にある景正功名塚^{かげまさ こう みょう づか}を中心に大正時代に長岡安平^{ながおか やすへい}によって設計された金沢公園^{かねざわ こうえん}一帯です。その範囲は東西南北とも約120mで、面積は14,400㎡です。

金沢柵^{かねざわ}特定のためには、館と区画施設^{やぐら ほり さくれつ}（櫓・堀・柵列など）を確認しなければなりませんが、今回は区画施設の検出を目的としました。山の斜面に段状地形^{だんじょう ち けい}が見えることから、大鳥井山遺跡や陣館遺跡と共通する可能性が高いと想定し、頂上部の景正功名塚から裾部の道路に向かって南側と西側に試掘溝（トレンチ）を設定し、その内容を確認することにしました。



調査の結果、柱掘り方^{はしら ぼり かた}1地点、溝跡^{みぞあと}4条、塚跡^{づかあと}1基、整地地業^{せい ち じ ぎょう}3地点、防空壕跡^{ぼうくう ごうあと}1地点などを検出しました。街道脇の南北の山側から谷側に向けて設定したトレンチ (②) では、約3mの平坦部に柱



掘り方を検出しました (③)。③の写真に見える黒い柱状の痕跡は、昭和時代に作られた火の^み見^{やぐら}跡です。その間に斜面に対して直交すると想定される布掘り状の溝跡を確認しました。調査を進めたところ、表土から1.1mの深^{はしらざい}さで柱材を、1.5mで柱掘り方を確認しました (④)。断面写真からこの溝跡の上面幅は表土



下で約2m、岩盤上面で約1m、底面で0.8mです。底面で確認された柱掘り方は、方形で長軸0.8mを測り、柱材の長さは55cm、直径は35cmでした (⑤)。底面には柱掘り方と接続する溝跡がありました。ボーリング棒でその深さを確認したところ、30cmあったことから、長さ85cmの柱材が残存していることになります。この布掘り状の溝跡の堆積土は柱材より下位は縞状に細く互層となっていることから、版築^{はんちく}で埋められたと思われます。上位はやや乱れていることから、柱材を切るか、その際掘り返された痕跡と考えられます。溝跡の山側地^{かいしよくど}山面には灰色土の柱掘り方2基があることから、布掘り状の溝跡が掘られる以前にも何らかの区画施設があったことが想定されます。



一本の柱材が建物になるためには、他に最低でも3本の柱が必要です。谷側か山側にも同じような溝跡があると考え、谷側にトレンチを延長しましたが、確認されなかったことから、山側の一段高い場所に存在していると思

われます (②)。②の写真の右側のトレンチでは、布掘り状の溝跡が確認されず、断面が楕円形の溝が確認されており、区画施設かどうか検討を進めています。左側のトレンチで確認された布掘り状の溝跡を追跡すれば、その建物の規模が分かります。未だ推定の域をでませんが、建物跡が斜面にある平坦面を利用して造られていることから、櫓の可能性が高いと考えられます。

今回の調査では、遺物の出土はありませんでしたが、遺構では布掘り状の溝の掘り方を採用していることや堆積土が版築状になっていること、また柱掘り方が方形で、柱材とともにその規模が大きいことなど手間のかかる仕事をしており、中世というよりは古代的な施設と考えられます。次年度の調査によりその様相が明らかになると思われます。

(横手市教育委員会)



つつみ さわ やま
堤沢山遺跡

かわ ぐち あざ だい がくつつみさわ やま
由利本荘市川口字大学堤沢山

堤沢山遺跡は、J R羽越本線羽後本荘駅から北東1.9km、秋田県立大学本荘キャンパスの東方100mに位置し、標高30～50mの丘陵に三方を囲まれた沢と斜面に立地します(①)。平成15・16年度に日本海沿岸東北自動車道建設に先立ち発掘調査が行われました。今年度は自動車道に車線を付加する工事に伴い、前回の調査区北東部に隣接して南北方向に延びる沢の落ち込みと東側の斜面を対象とした調査の2年目となります(②)。



昨年度までの3か年に及ぶ調査によって、^い 鋳物を作る^{ちゅうぞう} 鋳造遺構及び炭窯跡など鋳造に関わる遺構のほか、製鉄炉跡や鍛冶炉跡などが確認されました。また、^{ぼんしやう} 梵鐘鋳造遺構(③)では^{い がた しぼ} 鋳型を縛って固定した掛木の痕も見つかっています。特徴的な遺物として、^{は ぐち} 鋳型や羽口(送風管)のほか、^{ろ へき てっさい} 炉壁や鉄滓などが出土しています。中でも梵鐘や仏具の鋳型は、県内では初めて出土したものです。梵鐘最上部の^{りゅうず} 龍頭、そして^{しゅもく} 撞木で^{つぎざ} 撞く部分の^{けい} 撞座(④)の

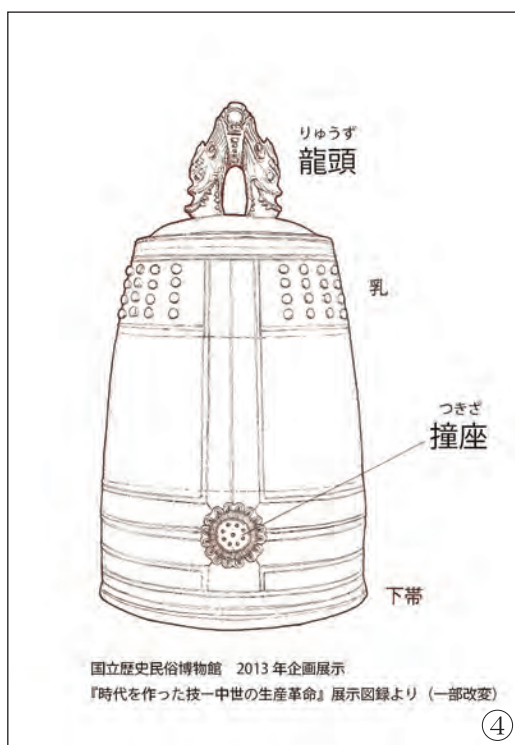
^と 鋳型のほか、寺院で執り行われる法会の際に使用する^{ほうえ} 磬と呼ばれる^{けい} 仏具、鍋や羽釜の鋳型なども出土しました。これらの結果から、堤沢山遺跡では12～13世紀代に梵鐘や磬などの^{なべ はがま} 仏具とともに、日常用具の生産も行われていたことが分かりました。



今年度の調査では、調査区外へと続く東側の緩斜面から、炭窯1基(⑤)が確認されました。炭窯は試掘溝により一部が壊されており、さらに調査区外へ続くことから全体の形状は不明ですが、残存状況から長さ2.78m、幅1.20m以上の規模を有しています。おそらく斜面下の南側に焚き口が、斜面上の北側に煙出しがあったものと思われますが、その痕跡は確認できていません。また炭窯の底面外周に



は、防湿のためと思われる幅23~58cm、深さ15cmの溝が掘られていました。床面に強い被熱痕は認め



られないものの、床上には木炭が残され、さらに埋土には多量の炭化物が含まれていました。この状況から炭窯は伏せ焼き窯であったものと考えられます。伏せ焼き窯は、地面を掘り込んだ後、床上へ木材を敷き、その後土を被せた屋根を設けて焚き口近辺で火を起しますが、直接木材に火を付けず、蒸し焼きの状態にします。このため床面に強い被熱の痕跡が残らなかったものと思われます。炭窯は遺跡内で他に4基確認されていますが、その内2基が伏せ焼き窯で、他の2基は緩斜面をトンネル状に掘り抜いて木炭を生産していた登窯(のぼりがま)でした。これらの炭窯では、遺跡内の様々な作業に使われる木炭が生産されていたものと考えられます。今回確認された炭窯の東側は調査区外となりますが、比較的平坦な地形が続くことから、一連の作業場があったことが考えられます。また遺物として、調査

区中央を南北に流れる沢から少量の炉壁や鉄滓が出土したことから、遺跡の調査区外に隣接する標高の高い部分にさらに作業場が設けられていた可能性もあります。そのほか縄文時代の石器剥片(はくへん)などが少量出土しました。

これまでの4年間の調査で、出土した多量の遺物の分析などにより、堤沢山遺跡では土と採り、製鉄、鑄込み、鍛冶、排滓、生活に直接関わる場がエリア毎に展開しており、綿密な計画のもとに製鉄や鑄造、鍛冶に関わる操業が行われていたことがわかりました。今後は周辺の同時代の遺跡と比較検討することで、堤沢山遺跡の性格がより深く分かっていくものと思われます。





史跡檜山安東氏城館跡 (檜山城跡)

能代市檜山字古城ほか

檜山城跡は、米代川河口から約12km内陸に入った標高146mほどの霧山につくられた山城の跡です。明応4（1495）年に安東忠季が築いたとされ、戦国期の愛季、実季の時代を経て、安東氏国替え後には、元和6（1620）年に徳川幕府による一国一城令で破却されるまで佐竹領内の城として使用されました。昭和55年に大館跡、茶臼館跡、国清寺跡とともに国の史跡に指定されています。



檜山城跡では昨年度から発掘調査を実施し、今年度が2年目となります。古城地区（②）を中心に調査を進めていく方針で、今年度は昨年度に引き続き、通称三の丸のトレンチ調査を行ったほか、城の構造をつかむために必要な大手道の確認のため、候補の一つである三の丸下の沢筋にある曲輪に1箇所、また、城内道の調査の継続として通称本丸の南側の細い帯曲輪、いわゆる犬走りの部分に1箇所の調査区を設定しました。このほかに整備のための坪掘りを行った箇所も含めて約131㎡の調査となっています。

三の丸では、柱穴が確認されたことから、建物が建っていたかどうか、あったとすればどのくらいの規模であったかを明らかにすることを目的に調査を行いました。昨年度整地層と考えていた層は、城時代の堆積層と考えられます。その上に公園時代・畑時代の攪乱層が形成されています。柱穴は100基以上が検出されましたが、柱が並んだのは1間×2間で、延長上に数基は確認できますが建物の



の規模の特定までには至りませんでした（③）。遺物から、この曲輪が広場や兵士の駐屯のために使われたのではなく、ある程度の生活の実態があった場所であることがわかります。特に喫茶に関する遺物がみられました。一方で、るつぼや鉄製の鉄砲の弾など、城の機能としての戦闘に関わる遺物が出土しています。るつぼは、鉄の弾を作るためのものではなく、その大きさから銅製品をつくるためのものであったと考えられます。



また、檜山城跡の地盤がどのような堆積をしているのか、ある程度の予想はできるようになりましたが、さらに確実にするために掘り下げを行いました。三の丸は砂の堆積が厚く、海成の砂礫層やその上の飛砂が堆積したものと考えられますが、砂と砂利の互層が形成されています。檜山城跡では、その互層が、三の丸の櫓台と呼んでいる場所で確認され（④）、その互層が平場にまで続いていることから自然堆積と考えています。これが人為的であればものすごい土木工事量ということになり、それはそれで安東氏の力を示す城づくりの痕跡であったということになります。いずれにしろ、遺物の出土が少なく、互層からは1点の出土もありませんでした。

沢筋の調査では、登城するのに沢を上ってくるルートを仮定し、沢の横に延びる尾根の中腹に張り出すように造成された曲輪に、通行に関わる防御施設などを想定して調査を行いました。その結果、盛土で形成された曲輪であることがわかりました。建物跡などの痕跡は検出されず、主要な登城道であれば出入りを監視する役割を果たすであろう位置にある割には、使用頻度の低い曲輪であった可能性があります。

通称本丸下の南側の調査では、本丸と、その下の家臣屋敷地とも考えられる曲輪の間にある犬走りを発掘しました（⑤）。調査の結果、城内を結ぶ通路として使われた痕跡が確認されました。地表面観察からも看取できる現在の遊歩道として使われた面が一番新しく、本丸の切岸の一部を急角度に削っていたことが分かりました。この部分は通称二の丸方面から枡形虎口に続く通路上にあり、下の曲輪からの登り道も合流する場所です。虎口側に進むと道はやや左に曲がっていて、本丸東の曲輪に接続します。なんらかの施設があってもおかしくない場所ですが、明確には見つかりませんでした。最初の造成は約60cm下の道路、または道路として使うための犬走りを作るために、本来は本丸の切岸から下の屋敷地の切岸となっているものの斜面上に、盛土をして行っていることがわかりました。地崩れなどのことを考えれば、切土で造成したいところですが、ここでは、盛った土の上に硬化面をつくり、道にしています。防御という意味では、本丸までの高さが相対的に低くなって不利ですが、それでも城の構造上、現在の地表面観察できる形態が選択されたということになります。東の曲輪からほぼ水平に通る道として現在に至っています。




（能代市教育委員会）

おお だて じょう あと
大館城跡

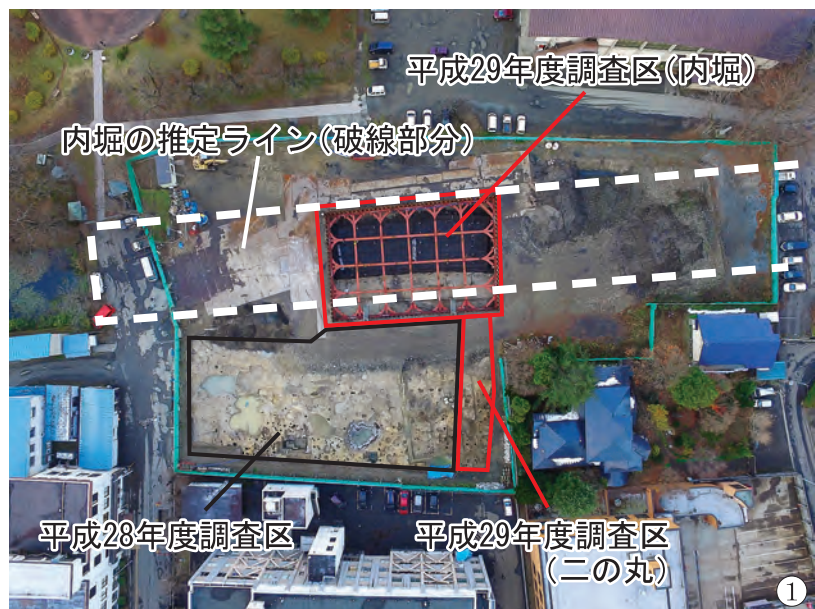
おおだてしなかじょう
大館市中城

大館城跡は、大館市街地の中心部、米代川の支流である長木川^{ながきかわ}左岸の展望のよい段丘上に位置する中世～江戸時代の城跡です。遺跡は南側を米代川、北側を長木川に挟まれた西向き^{ぜつじょう}の巨大な舌状の大館段丘北縁に立地し、標高は69～71mです。

大館城は16世紀後半に浅利勝頼が築城したといわれ、浅利氏滅亡後は秋田氏の支配下に置かれました。その後、慶長7年（1602）佐竹氏の出羽国への国替えにより、慶長15年（1610）に佐竹氏一門の小場義成が大館城代に任命され、城の改修・拡張や町割を行いました。以後、小場氏（のちの佐竹西家）は、幕末までの約260年間、大館北秋田地方を治めました。大館城は、慶応4年（1868）の戊辰戦争により盛岡藩の攻撃を受け、城代の佐竹義遵は城に火を掛け退却し、落城・焼失しました。廃城後、本丸跡には明治35年（1902）に高等小学校が開校され、昭和31年（1956）には桂城公園として整備されて今日に至ります。



大館城の発掘調査は、市役所本庁舎建設事業に伴うもので、城跡の本丸外側を巡っていた土居及び内堀の一部、堀に面した道、二の丸の武家屋敷の一部を調査対象範囲とし、昨年度から3か年の予定で大館市教育委員会が実施しています。調査2年目となる今年度は、昨年調査を行った二の丸の一部（97㎡）を拡張し、また本丸に隣接する大館城の内堀の一部（646㎡）を調



二の丸部分の拡張区から複数の柱穴や土坑を検出しましたが、建物等は復元できませんでした。
しかし、土坑内から大館市では茂木屋敷跡に続いて2例目となる京焼の色絵皿が出土しています。

現在、大館城の堀は部分的にしか残存していませんが、江戸時代に作成された大館絵図によると、今回調査を行った内堀は、本来は本丸を取り囲む様に設けられていました。しかしながら、昭和45年に市民プールの建設により大館城の内堀の大部分が未調査のまま埋められてしまい、長い間詳細な構造等は不明のままとなっていました。そこで今回、大館市役所本庁舎建替え工事に先立ち、市民プールを解体して記録保存のための発掘調査を行いました。

調査の結果、地表面から約2.4mはプール建設時の工事で削平^{さくへい}されていましたが、検出された残存部より当時の形状^{うかが}を窺い知ることができます。堀の深さは地表下より約4.5m、幅は検出段階では最大約16.5mを測ります。また、堀は基盤層である約15,500年前に十和田火山の噴火で堆積したシラス層（十和田八戸火砕流^{かさいりゅう}）を掘り抜き、その下位の泥炭層^{でいたんそう}まで掘削が及んでいることが分かりました。シラス層と泥炭層の境目からはシラスが堆積した際に薙ぎ倒された樹木が良好な残存状況で検出され



ています。

堀の土層はおおまかに上・中・下の3層から構成されています。上・中層は、空き缶やガラス片等が出土



していることから、近代～現代に堆積したと考えられます。下層からは数は多くないものの17～19世紀に作られた肥前^{ひぜん}・瀬戸^{せと}・美濃^{みの}産などの陶磁器や木製品が出土しているので、江戸時代に堆積した層であることが分かります (②・③)。

また、特徴的な構造として注目されるのは、堀の長軸方向に直交するように底面に掘り残された畝状^{うねじょう}の隆起です (④)。調査区内で3条確認されており、幅約1.4m、高さ約0.5m、畝と畝の間はほぼ等間隔で、13.2m～13.5mと概ね7間 (1間＝6尺3寸換算) を測ります。畝の断面を観察すると、土を盛って形成した様子が見られないことから、堀底を畝状に掘り残して構築されたものです。この畝状遺構については、城の立地上、北西に向かって標高が下がるため、その方角に流下する水を堰き止め、水堀^{みずぼり}としての機能を維持するための堤^{つみ}だったのではないかと推定されます。



また、堀の構造に関連するもう一つの特徴として、本丸側の堀の斜面が急峻な造りとなっていることがあげられます。一方で二の丸側の斜面はやや緩やかな傾斜となっており、いずれも堀底から約0.8mの高さの斜面上に平坦面を設けています (⑤)。特に本丸側において平坦面の幅が広く、堀に並行して幅約0.8m、最大深度約0.6m程の溝が設けられています (⑥)。この平坦面と堀に並行する溝を設けた理由として、1. 土砂の直接流下による堀の埋没を防ぐための緩衝地 2. 溝を利用した本丸防衛設備 3. 堀の施設維持のための管理通路などが推定されますが、現段階では不明です。



次年度以降も発掘調査は継続して行う予定であり、今後調査が進むことで、当時の大館城の様相や全体像が明らかになることが期待されます。

(大館市教育委員会)



おお さわ

大沢 I・II 遺跡

ふた つ い まち あそ う あざおお さわ

能代市二ツ井町麻生字大沢

大沢 I・II 遺跡は能代市東部の下田平集落の南東、米代川と阿仁川に挟まれた独立丘陵地の縁辺部に立地します (①)。この丘陵地の西側は、小谷により中央部から東西に開析されており、その両側には段丘が発達しています。大沢 I 遺跡は小谷南側の標高約42mの低位段丘上、大沢 II 遺跡は小谷北側の中位段丘と低位段丘の間の段丘崖に形成された標高約68mの平坦面に位置しています。また、大沢 II 遺跡南西の低位段丘上及び低地には、平成26年度に調査された縄文晩期の下田平遺跡が、阿仁川の対岸には縄文晩期の土面を出土した麻生遺跡があります。

調査の結果、大沢 I 遺跡からは縄文時代の堅穴建物跡 2 棟、貯蔵穴 8 基等が見つかり、縄文時代の



集落が営まれていたことがわかりました。調査範囲の東側は浅い沢状の地形となっており、建物や貯蔵穴はこの沢に沿うように配置されていました (②)。



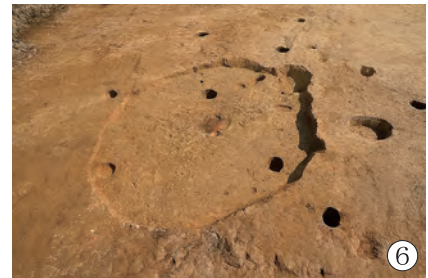
堅穴建物跡のうち、写真②の手前の 1 棟は、建物全体は調査できなかったものの、平面形が楕円形で、石で囲まれた炉がありました。出土遺物から、縄文時代中期後葉のものと考えられます。もう 1 棟は、耕地整備のため上部が削られていましたが、平面形が楕円形を呈すると推定され、床面の東寄





りに石で囲まれた炉が設置されていました(③)。出土遺物から、縄文時代晩期のものと考えられます。

貯蔵穴は、断面形が底面付近で広がる、フラスコ状土坑^{どこう}とか袋状土坑^{ふくじょうどこう}と呼ばれるものです。底面の直径は1.6~2.2m、深さ0.4~0.9mで、底面に小さな穴を掘っているものもありました。遺跡内の堆積層は場所によって厚い礫の層があり、その礫層を掘り込んで深い土坑を造りあげる縄文人の熱意には全く感心させられます。



大沢Ⅱ遺跡では、西に向いた奥行きが20mほどの帯状の平坦面から、縄文時代の竪穴建物跡3棟、平安時代の竪穴建物跡2棟等が見つかり、縄文時代と平安時代に集落が営まれていたことがわかりました(④)。

縄文時代の竪穴建物跡のうち、1棟は床面に深鉢形^{ふかばちがた}の土器を埋めた炉のほか、2か所で熱を受けた跡^{はしらあな}がありました(⑤)。柱穴^{ちようふく}の多さからも建て替えまたは重複^{ちようふく}があると考えられますが、炉と柱穴の組み合わせや変遷を含め、今後検討していく予定です。残りの2棟は平面形が楕円形で、中央付近に床面を掘りくぼめた炉がありました。うち1棟の長軸上の壁際には、0.7×0.6mのピットが設けられていました(⑥)。これらの建物跡は、時期差はあるものの、縄文時代中期のものと考えられます。



平安時代の竪穴建物跡2棟は平面形が方形で、どちらも南壁の東寄りにカマドが設けられており、10世紀頃の年代が想定されます。うち1棟では、カマド内に壁体^{へきたい}が重ねられていました(⑦)。これは、家の廃絶に関する行為の一つとも考えられます。

米代川下流域の縄文時代中期の大規模遺跡としては、能代市二ツ井町に所在する鳥野遺跡^{からすの}がよく知られています。大沢Ⅰ・Ⅱ遺跡は小規模な集落遺跡と考えられますが、確認された竪穴建物跡には、鳥野遺跡と同時期あるいは後続する時期のものが含まれており、これらの遺跡の関係についても興味が湧いてくる遺跡といえます。

(能代市教育委員会)



よろい が さき じょう あと 鎧ヶ崎城跡

ろく ごう ひがし ね あざ きたよろい が さき 美郷町六郷東根字北鎧ヶ崎

鎧ヶ崎城跡は、J R 奥羽本線後三年駅から北東約 7 km に位置する山城です。城の北には、善知鳥川、七滝川、湯田沢川の 3 つの川が合流した丸子川（旧名：荒川）が流れ、払田柵跡の南側に通じています。川の旧名「荒川」と同じ地名も城跡付近に存在することから、奥州藤原氏の初代清原（藤原）清衡の養父で「荒川太郎」を名乗った清原武貞との関連性が指摘され、武貞の本拠と考えられるようになったようです。六郷東根妻の神地区から蛇沢地区まで続く南北に長い丘陵全体が遺跡の範囲となっており、範囲内には 2 つの異なる城館跡があります (①)。



北側の城館跡は、頂上が約 60 × 40 m の楕円形で、3 段の帯曲輪で構成されています。北側と西側が急斜面になっており、周囲には横堀と土塁、連続する短い堅堀（畝状堅堀群）が巡らされています。平成 26 年度に調査を行った結果、城の縄張り形態と地山直上から出土した銭貨（永楽通宝）から、北側の城館跡は戦国時代のものであることが確認できました。

南側の城館跡は、南北に連なる長い尾根から西側の麓まで平場が段状に続き、平場の先端部や緩い斜面の所々には堅穴のようなくぼみや山側への侵入を阻む堀のような溝跡が地表面に見られます。城の東側には、東方に突き出た見張り台のような平場を 2 か所ほど確認でき、斜面にも堀切のような地形が見られるため、東側にも人為的な防御が施されているようです。

平成 28 年度には、遺跡西側山裾から頂上まで続く斜面に見られる堀切と土塁、さらに一段上の平場に見られる堀切をトレンチ調査しました。しかし、遺物が出土しなかったため、堀が形成された時期を特定するまでには至りませんでした。



今年度は、西側の山裾に見られる堀のような溝跡、および斜面にトレンチを設定して試掘調査を行い、堀跡1条、溝状遺構1条を検出しました。

堀跡(②)は、上端幅3.6m、深さ(自然堆積層含む)1.5mで、底部や壁面は角礫主体の土になっており、堀の埋土は小さなアマ石混じりの固く締まった土になっていることが分かりました。堀は斜面の小さな崩れなどの堆積を繰り返しながら長い時間を経て自然に埋まったものと考えられ、堀が埋まった後に堆積した黒色土層(自然堆積層)上部からは須恵器甕の破片が出土しています。

段状の平場の端部からは、溝状の遺構(③)が確認され、城の構造から考えると、柵跡であった可能性も考えられます。今後は溝の延長方向にトレンチを広げ、溝跡の範囲やどのような性格の遺構なのかをさらに見極める必要があります。

遺物は、4か所設定したトレンチの黒色土層(自然堆積層)内から、縄文土器、土師器、須恵器の破片がそれぞれ出土しましたが、いずれも遺構内からのものではないため、城が機能した時期の特定はできませんでした。

過去に鎧ヶ崎城跡の山裾からは、土師器や須恵器の破片が大量に出土し、

不整形な土器も多いことから、窯跡も存在したと考えられます。土器の器形等から9世紀後半～10世紀前半における土器の生産域であった可能性が高く、丸子川の下流にある払田柵跡との関係についても注目されます。

また、今年度、城から南東に約500m離れた場所の山腹を試掘調査したところ、礎石に使用されたような石や須恵器甕の破片、灯明皿として使用された11世紀後半のかわらけ(④)などがまとまって出土し、今後、後三年合戦との関連性においても、鎧ヶ崎城周辺にさらに注目が集まりそうです。

(美郷町教育委員会)



年 表

年代	時代		県内の主な遺跡	秋田県の歴史	日本の歴史
約30,000年前	旧石器時代		縄手下遺跡（能代市） 家の下遺跡（三種町） 風無台Ⅰ遺跡（秋田市） 小出Ⅳ遺跡（大仙市） 米ヶ森遺跡（大仙市）	秋田県に人が住みつき、ナイフ 形石器や台形石器を使う。	日本列島に人が住みつき、石 器を使った狩猟生活を行う。
約13,000年前	縄 文 時 代	草創期	岩瀬遺跡（横手市）	大型の竪穴建物がつくられる。 地方色豊かな円筒土器、大木式 土器がつけられる。	土器づくりが始まる。 狩猟生活が盛んになる。
約9,000年前		早 期	根下戸道下遺跡（大館市） ◎岩井堂洞窟（湯沢市） 菖蒲崎貝塚（由利本荘市）		
約6,000年前		前 期	池内遺跡（大館市） 上ノ山Ⅱ遺跡（大仙市） ◎杉沢台遺跡（能代市） 上掬遺跡（東成瀬村）		
約5,000年前		中 期	○萱刈沢貝塚（三種町） ○一丈木遺跡（美郷町） 天戸森遺跡（鹿角市） 大沢Ⅰ・Ⅱ遺跡（能代市）		北陸で火焔土器がつけられる。
約4,000年前		後 期	●大湯環状列石（鹿角市） ◎伊勢堂岱遺跡（北秋田市） 高屋館跡（鹿角市） 漆下遺跡（北秋田市） 中山遺跡（五城目町）		北海道・北東北の各地で環状 列石がつけられる。 関東で環状の貝塚がつけられ る。
約3,000年前		晩 期	白坂遺跡（北秋田市） 戸平川遺跡（秋田市） ○矢石館遺跡（大館市） ○柏子所貝塚（能代市） ○湯出野遺跡（由利本荘市）		亀ヶ岡文化が栄える。 九州で水田稲作が始まる。
約2,300年前	弥生時代	続 縄 文 時 代	◎地藏田遺跡（秋田市） 横長根A遺跡（男鹿市） はりま館遺跡（小坂町）	狩猟・採集を中心とする生活に 稲作が加わる。	邪馬台国の卑弥呼が中国に使 いを送る。
約1,700年前	古墳時代		寒川Ⅱ遺跡（能代市） 一本杉遺跡（横手市） 田久保下遺跡（横手市） 下藤根遺跡（横手市）	北海道と同じ土器や墓がつけら れる。	前方後円墳がつけられる。
	飛鳥時代				律令政治が始まる。
西暦710年	古 代	奈良時代	○岩野山古墳群（五城目町） ◎秋田城跡（秋田市） 竹原窯跡（横手市） 柏原古墳群（羽後町）	出羽国を置く。 出羽柵を秋田清水岡に遷す。 雄勝城、由理柵がつけられる。	平城京に都を遷す。 和同開珎がつけられる。 東大寺の大仏が建立される。
794年		平安時代	◎弘田柵跡（大仙市・美郷町） ○横山遺跡（由利本荘市） 片貝家ノ下遺跡（大館市） 手の上遺跡（湯上市） ◎大鳥井山遺跡附陣館遺跡 （横手市） 鎧ヶ崎城跡（美郷町） ○矢立庵寺跡（大館市） 金沢城跡（横手市）	元慶の乱が起こる。 十和田湖が噴火する。 清原氏が栄える。	平安京に都を遷す。 坂上田村麻呂が征夷大將軍と なる。 平将門の乱が起こる。 源氏物語・枕草子が書かれる。 平泉に藤原氏が栄える。
1185年	中 世	鎌倉時代	堤沢山遺跡（由利本荘市） ○大畑古窯跡（大仙市） 観音寺庵寺跡（横手市）	鎌倉御家人が秋田に入る。	源頼朝が鎌倉幕府を開く。 承久の乱が起こる。 元寇が起こる。
1338年		室町時代	後城遺跡（秋田市） 竜毛沢館跡（能代市） ◎檜山安東氏城館跡（能代市）	秋田湊が栄える。	足利尊氏が室町幕府を開く。 応仁の乱が起こる。
1573年		安土桃山時代	○山根館跡（にかほ市） ○戸沢氏城館跡（仙北市） ○本堂城跡（美郷町） ○豊島館跡（秋田市） ◎脇本城跡（男鹿市）	安東氏、小野寺氏、浅利氏、戸 沢氏、六郷氏などが各地で戦う。	織田信長が安土城を築く。 豊臣秀吉が天下を統一する。 関ヶ原の戦いが起こる。
1603年	近 世	江戸時代	大館城跡（大館市） 久保田城跡（秋田市） △旧秋田藩主佐竹氏別邸（如斯亭） 庭園（秋田市） ○白岩焼窯跡（仙北市）	佐竹義宣が秋田に転封される。	徳川家康が江戸幕府を開く。

太字は報告・展示遺跡 ●国指定特別史跡 ◎国指定史跡 △国指定名勝 ○県指定史跡

平成29年度 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料

編集・発行：秋田県埋蔵文化財センター 発行日：平成30年3月11日（日）

〒014-0802 秋田県大仙市弘田字牛嶋20番地

電話 0187-69-3331 F A X 0187-69-3330 e-mail maibun@pref.akita.lg.jp